

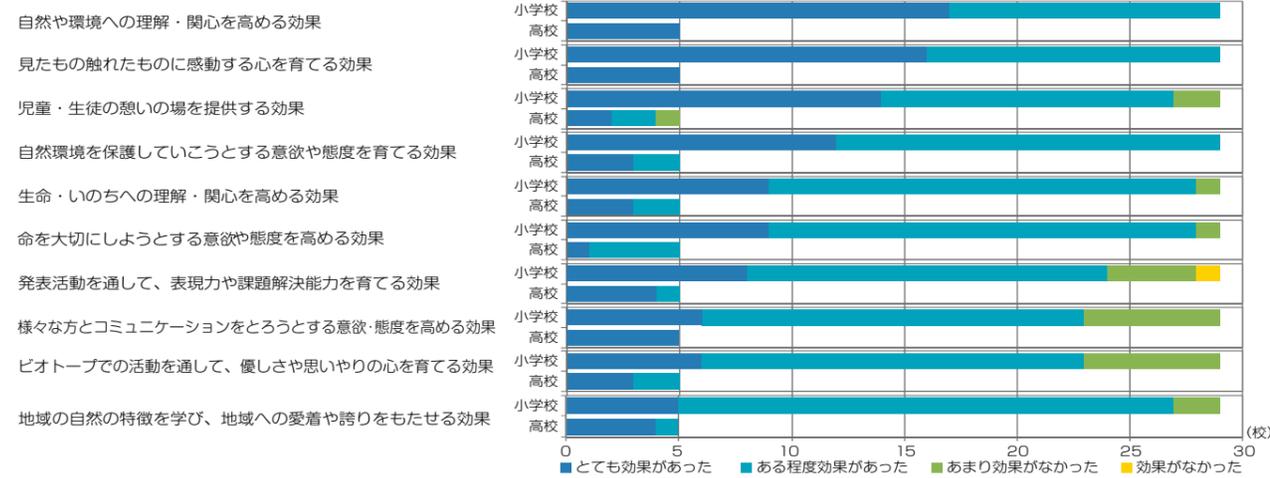
### 3年間の生物多様性体験学習推進事業をふりかえって (担当者へのアンケート結果から)

#### 生物多様性体験学習推進事業実施校

平成 20 年度	小学校 13 校	高等学校 2 校	計 15 校	調査期間/平成 23 年 2 月 3 日 (木) ~ 10 日 (木)
平成 21 年度	小学校 9 校	高等学校 3 校	計 12 校 (20 年度実施校 2 校含む)	調査方法/事業実施校のビオトープ管理者への FAX または メール による アンケート
平成 21 年度	小学校 8 校	高等学校 3 校	計 11 校 (21 年度実施校 2 校含む)	回収率/100%
3 ヶ年 計	小学校 29 校	高等学校 5 校	計 34 校	

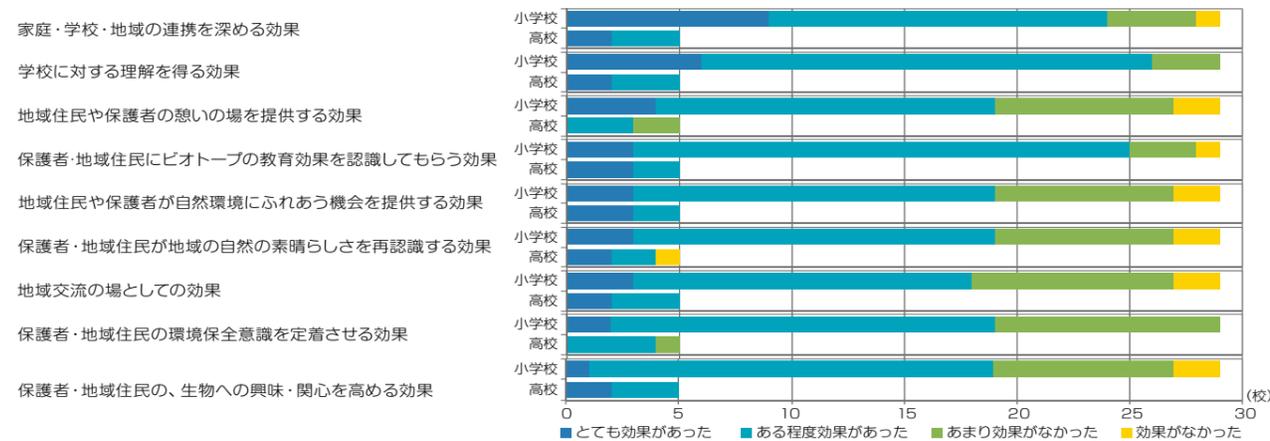
#### 児童・生徒への効果

(小学校 N<sub>1</sub> = 29 高等学校 N<sub>2</sub> = 5)



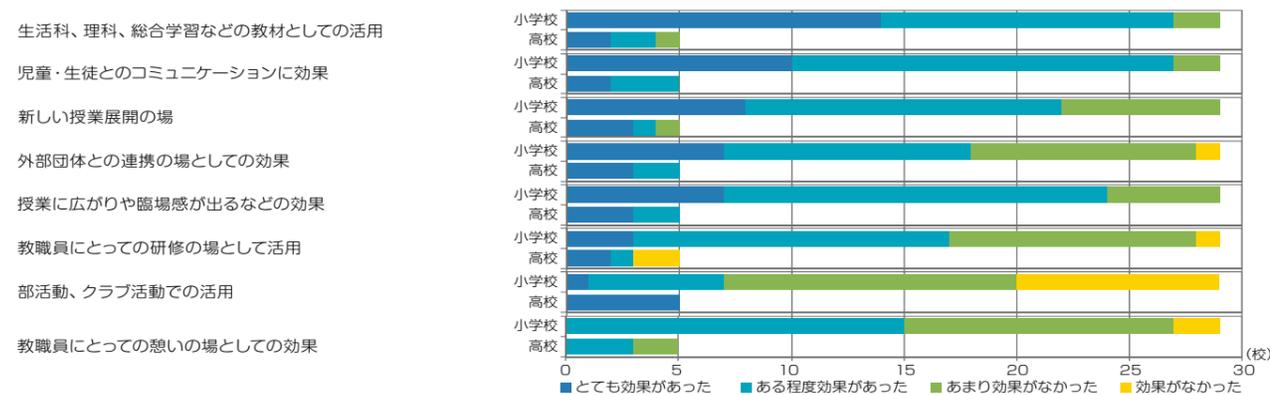
#### 保護者・地域住民への効果

(N<sub>1</sub> = 29 N<sub>2</sub> = 5)



#### 教職員への効果

(N<sub>1</sub> = 29 N<sub>2</sub> = 5)

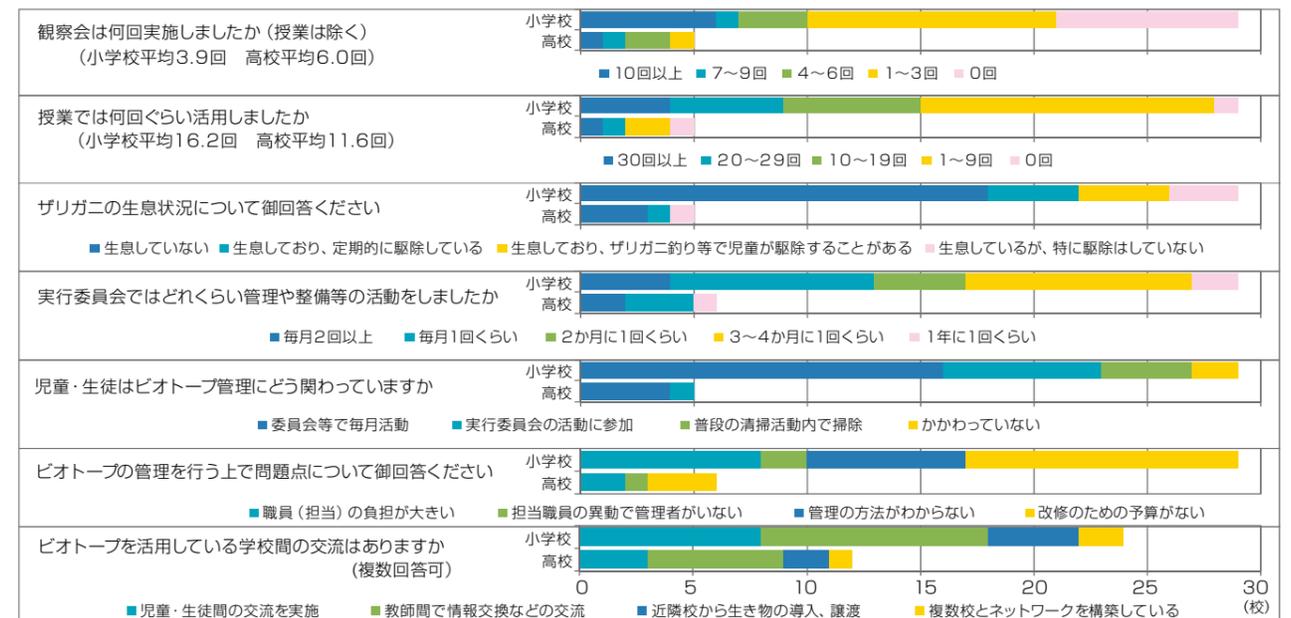


#### 〈学校ビオトープ活用による教育的効果について〉

- 児童・生徒にとって、自然や環境への理解・関心を高めるために、学校ビオトープは有効といえる。
- 学校ビオトープは子どもたちの学校生活における憩いの場となっており、また見たもの触れたものに感動したり、生命の尊さを学ぶ場としての効果大きい。
- 本事業のように保護者・地域・学校等によって構成される実行委員会形式の取組では、特に家庭と地域、学校の三者による連携を深める効果があり、学校の教育方針やその取組についての理解を深めることができる。
- 特に小学校では、生活科や理科、総合的な学習の時間に、教材として活用することが多く、今回の整備によって新しい授業展開の場としてとても効果があったことがわかる。
- 高校では、部活動の中で積極的に活用されており、優れた地域教材として研究活動に利用されているといえる。

#### 保護者・地域住民への効果

(N<sub>1</sub> = 29 N<sub>2</sub> = 5)



#### 〈事業実施校の管理・活用状況から〉

- 一部校舎の改修や耐震工事などの関係で、今年度ビオトープを利用できなかった学校もあったが、多くの学校で観察会を実施している。
- 特に小学校では、ほぼ半数が10回以上授業で利用している。
- ビオトープを通じての学校間交流も盛んになってきており、児童・生徒間の交流や教員間の情報交換のほか、複数校でのネットワークを構築している学校もみられるようになった。
- 管理上の問題点としては、学校ビオトープの改修・管理に係る予算に関することが多く、さらには担当者の負担や異動による管理者不在などの課題がある。
- 小学校、高校ともに、外来種のザリガニが約4割の学校に生息しており、一度進入すると取り除くことが難しく、その駆除についての負担が大きいといえる。

#### 〈今後の課題〉

- 生物多様性の保全・教育の場としてのビオトープへの理解は進んでいるが、今後、特に以下の項目についてさらに理解を深めていく必要があると思われる。
- 生物を導入する前に、その生物が継続的に生息・生育・繁殖できる環境をつくる。
- 生物を導入する際は、由来の明確な地域の個体を選ぶ。
- 外来生物の影響についての普及啓発を行うとともに、必要に応じて排除したり、その影響を最小限にとどめる努力をする。
- 池は、生物の生息・生育のために重要な環境であるが、水辺だけでなく草地や林、田畑など、さまざまな環境にも目を向けていくことが必要である。
- 専門家の助言をしっかりと受けながらより効果的なビオトープにしていく。